

地域経済研究会シンポジウム

「地域経済学研究における空間認識と理論形成」

本特集は、2007年8月4日に京都大学で開催された「地域経済学研究における空間認識と理論形成」と題するシンポジウムの記録である。このシンポジウムでは、水島和哉氏（京都大学大学院）が景観と消費との結びつきから都市形成を捉える議論を展開し、続いて三輪仁氏（京都大学大学院）が空間に関する諸理論を踏まえながら、メディア産業と地域経済の連関について報告した。また、宇都宮千穂氏（京都大学大学院）が生活者の視点から地域経済を俯瞰することによって、都市形成過程を明らかにするとともに、池島祥文氏（京都大学大学院）が空間編制に着目しながら都市と農村の関係性を見直しを試論的に提起した。

4つの報告を踏まえ、報告者とフロアをまじえた活発な討論が行われ、地域経済学における理論と実証をフィードバックさせていく方向について検討がなされた。

次頁には、シンポジウム実行委員会によるシンポジウム開催にあつた趣意書を採録している。シンポジウムの目的および報告者の問題意識を汲み取ってもらえれば幸いである。なお、本特集に収録された論文は、報告後に加筆・補正したものである。

『資本と地域』編集委員会

シンポジウム開催にあたって

“globalization”がひとつの時代を象徴する言葉として定着し、それに伴い、現実の経済現象のみならず、経済学においても、時間的・空間的普遍性を前提とする諸理論が隆盛となっている。普遍性を追求する経済理論研究に対して、地域経済学研究の多くは地域にまつわる多種多様な経済事象を取り上げ、“地域の固有性”に着目してきた観がある。研究の細分化が進む中で、研究対象の細分化“trivialization”が進み、それぞれの研究に通底する共通の問題意識や理論的傾向等を見出すことは困難な状況になってきている。個別のかつ具体的事例を対象とする限り、その事例はかならず領域的な場“place”をもつ。だが、そうした場をもつ研究の総体が“地域経済学”なのだろうか。また、地域経済学のなかには重層的な構造をもつ大小様々な領域が、各々に固有な運動法則のもとで経済活動を展開していると考える論者もいるが、では、その固有な運動法則の一端を解明するにはどのようにアプローチすればいいのだろうか。

本シンポジウムでは、こうした問題意識を共有し、“地域経済学とは何か”と問い直しつつ、自らの研究を見つめなおす機会を生み出すことを目的としている。ともすれば、ケーススタディの羅列に陥りかねない危険を内包しているこの学問領域において、一般的なマクロ的経済観やミクロ的経済観だけでは把握できない、地域固有の経済現象を捉えるひとつの視角として、本シンポジウムでは“空間性”に着目することにした。各報告者は、自らの研究分野において、地域と空間性についての関連性を念頭に、これまでの研究成果を踏まえたうえで、新たな理論の形成を目指している若手研究者である。抽象的な理論研究や実証研究に過度に傾斜するのではなく、実証を通じて、分析枠組みとしての理論を再考し、さらに実証研究の水準を高め、地域経済学の理論全体を発展させていくという、理論と実証のフィードバックによる地域経済学研究の重要性とその方法について、若手研究者の視点から問題提起し、議論を深めてみたい。

(文責：シンポジウム実行委員会：池島祥文)